氏名	菅　実花
ヨミガナ	カン　ミカ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第656号
学位授与年月日	令和3年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉　人形写真論
	〈作品〉　Untitled 11,08,10,09,06,12,02,07－I Won't Let You Goより
	〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術研究科）	伊藤　俊治
（論文第１副査）	東京藝術大学	教授	（国際芸術創造研究科）	長谷川　祐子
（作品第１副査）	東京藝術大学	教授	（美術研究科）	鈴木　理策
（副査）	慶應義塾大学	教授	（経済学部）	新島　進
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術研究科）	小谷　元彦
（副査）			()	
（副査）			()	
（副査）			()	
（副査）			()	
（副査）			()	

（論文内容の要旨）

古来より人間は様々な人形をつくってきた。世界各地の神話や説話の中にも、人形に魂が宿って動き出すといった、人造人間に連なる物語がみられる。やがて工学技術の進歩によってからくり人形が作られるようになり、現代のアンドロイド・ロボット開発へと続いてい る。その背景には、技術的進歩に伴う人間観の変化が見て取れる。社会における人形の有り様を分析し、人形と人間の関係を紐解くことは、人間そのものを知ることに他ならない。

筆者は等身大人形を題材としたアートプロジェクトを現代美術の領域で展開し、一連の写真・映像作品を発表してきた。「ラブドールは胎児の夢を見るか」(二〇一六年)、「人形の中の幽霊」(二〇一九年)、「あなたを離さない」(二〇二〇年)は、さまざまな人造人間の表象の系譜を参照しながら、最先端の発生生物学や高度生殖医療が私たちに提示した新たな身体観や生殖の在り方を主題として「人間と非人間の境界」を問うものである。

本論の表題である「人形写真」とは、人形を被写体にすることで独自の表現効果が生み出された写真作品を指した言葉である。「人形写真」は撮影後に画像加工をしないことで事実の痕跡を示すと同時に、作り出されたイメージによって偽物を本物と錯覚させる作用を持 つ。美術史・写真史におけるその初出は一九二〇年代のバウハウスの実験写真の内に見られる。これ以降、等身大のリアルな人形を撮影したフィルムによる「人形写真」が何人もの写真家や美術作家によって制作されてきた。とりわけ人間と見分けのつかない精巧な人形の写真は、特に人間の認識を揺さぶるものだろう。しかし、今日では写真といえば画像加工が容易なデジタル写真であることが前提になっており、簡単にレタッチによるフェイクの写真を作り出すことができる。しかも写真を通して形成される人間の姿形の認識も変容しているため、人形的な人間の描写に違和感を持たなくなっている。したがって、もはやフィルム写真時代のようには「人形写真」は成立しなくなっていると言えよう。

本論は、現代における「人形写真」の構造と表現効果の範囲を実践的立場から明らかにすることを目的

とする。全体を通して、これまで「人形写真」を制作してきた筆者の自作のリファレンスを例に、被写体である「人形」と手段である「写真」の二つの観点から考察を進める。

（論文審査結果の要旨）

菅美香の論考「人形写真論」は人形を被写体にすることで独自の表現効果が生み出された写真作品を研究対象としている。デジタルやその他の加工をしない、ストレートな写真であることは元来人間のコピー、写しである人形が反映するさまざまな人間のリアリテイをそのまま議論の俎上にあげていくことになる。「人形」（被写体）と加工しない「写真」（手段）というきわめて古典的でシンプルな要素の組み合わせだが、菅の作品制作を通して得られた体験や新たな認識や感覚がそのシンプルな軸に厚みと説得力を与えている。

人間の社会的生物学的（アイデンテテイや生殖にまつわる）な多様な変化に対して「人形」が果たす役割、そして擬似人間を被写体とすることでリアルからずれて構成写真となっていくそこで現出する写真の別のリアルの力、といった点が論考の中心となっている。第一章では、人形を写真に撮ることで、霊魂の入れ物としての人形、生と死の境界を表象するものとしての人形などの媒介的な意味が明らかにされる。第二章ではアンドロイド、精巧な人間モドキとしての人形がその生殖の不可能性と人間を超えたパワーや能力によって、特にジェンダーとしての女性のポリテイクスにかかわってくる。第三章ではクローンの話と人形をデザインするプロセスが人間をデザインするプロセスとオーバーラップする。菅は女性のイメージ、人形を通しての男性の窃視的欲望を語りながら、その延長あるいは自己実現の極みとして、最後はセルフポートレイトとして自己を「人形化」する倒錯的混交に到る。

これは自己イメージの問題でもあり、写真イメージを介してのヒューマニテイの検証ともなっている。

自身を被写体とする管の方法論は、主体やいつでも客体に転倒しうるという自意識の「空白」を示しており、それは現代のポストヒューマン的な集合的な主体性の記述ともなっている。論考はレファレンスに一次文献が少ないのは残念だが、作品制作のコンセプト背景を理論的に構築するに足りるものとなっている。

（作品審査結果の要旨）

菅実花は2016年より等身大の人形を題材とした写真および映像作品を制作してきた。論文「人形写真論」は、これまでに発表した作品について改めて解説し、その上で博士審査作品について論じるものである。

第一章では編集不可能な19世紀写真が内包した魔術性と被写体としての人形の関係を、第二章では欲望の対象としての人形を生殖の観点から考察し、写真史における作例を挙げながら人形写真の構造と表現効果を分析している。第三章では博士審査作品の主題であるクローンについて小説や映画でのクローンの描かれ方や現代の高度生殖医療技術を参照しながら生命の複製をめぐる問題を論じているが、これは菅がこれまで作品において扱ってきた「人間と非人間の境界」という問いに対する総括的な論考となっている。生命の複製の問題に写真の複製性を引き寄せるかたちで、終章ではデジタル写真における表象を論じているが、自撮りや画像加工の普及によって変容した自意識とポートレート写真の表現性の関係性の考察を通して、わたしたちが写真に何を見ているのかを改めて問うものとなっている点が興味深い。

人形を即物的に撮影する際に露わとなる物質性は、人形を「ひとがた」として成立させるものとは何かという問いを生む。自らの顔を型取りして制作した自分そっくりの人形と共に写るセルフポートレートのシリーズ「あなたを離さない」は、人形の人間化と人間の人形化が近接する現代におけるポートレート論としての作品である。デジタル写真におけるインデックス性の消滅という主題を内包し、現代写真のア

イデンティティを問う作品であるが、敢えてSNSで散見される手法を採用しているため、本来の問題提起が見えにくくなった感があるが、制作のプロセスにおいて自らの論考を実証的に試行し、結実したものとして高く評価できる。

以上の理由から博士号に相当すると判断した。

（総合審査結果の要旨）

菅実花は、原爆の図丸木美術館での個展「ザ・ゴースト・イン・ザ・ドール（人形の中の幽霊）」(2019)や著作『〈妊婦〉アート論』(共著　青弓社　2018）の出版等で、多くの成果をあげてきた。これまで等身大人形を題材としたアートプロジェクトを展開し、2016年からはアンドロイド、ロボット、人形のイメージの系譜を参照しながら、最先端のロボット工学や発生生物学、生殖医療の現状もリサーチし、新たな身体ヴィジョンや生殖の未来を透かしだす刺激的な作品を発表し続けている。

特に「ザ・ゴースト・イン・ザ・ドール（人形の中の幽霊）」は、19世紀の古典写真技法であるガラス湿板法を用い、乳児人形（リボーンドール）を撮影したシリーズ「プレ・アライブ・フォトグラフィ」を中心とした展覧会だったし、『〈妊婦〉アート論』では、ラブドールが妊娠したという設定の修士修了作品「ラブドールは胎児の夢を見るか」(2016）を核に「人間と人形（非人間）の境界」を問う論考が提示されている。

博士論文「人形写真論」では、そうした作品制作のプロセスを踏まえながら、ラズロ＝モホリ・ナジやウンボのバウハウス写真からベルナール・フォコンの人形風景写真までの、アートの世界における人形写真の流れを俯瞰し、自作の展開を論じてゆく意欲的論考となっている。

「人形写真」は人形を撮影した写真でありながら、人形にも写真にも属さない独特のリアリティや表象効果を持っている。そのような人形写真にだけ可能な特性がどのように生成されてきたのかを歴史的に辿ると共に、デジタル写真時代における人形写真の新たな可能性を開く内容となっている。博士作品「I won’t let you go（あなたを離さない)」もこうした観点に立った力作であり、論文、作品ともに博士号に値いする内容を持つと評価し、審査員一同、合格と判断した。